一九五〇年代の台湾「白色テロ」の実態と特色

――外省人、本省人に対する弾圧とその狙い――

菊池一隆

はじめに

台湾では、蔣介石・国民党政権は中国共産党によって、大陸から放逐され、絶体絶命の危機に陥った。台湾からさらに逃亡する地域はなく、いわば背水の陣であった。台湾は五〇年間の日本植民地時代を経過したことで日本語・日本的思考の世界に変貌しており、不可避的に疑心暗鬼となった。官僚や富裕人士の一部は中米のコスタリカに土地を購入し、逃亡準備をしたともされる。一九四七年二・二八事件勃発に危機感を強め、大陸奪還の虚構を強調しながら、四九年五月（～八七年七月）戒厳令の発布後、実に三八年間に及ぶ独裁統治を実施した。特に五〇年代の「白色テロ」（以下、白色テロ）では徹底的な弾圧がおこなわれ、少なくとも五〇〇〇人もが殺害され、八〇〇〇人以上の本省人、外省人の「共匪」（中国共産党員）、愛国知識分子、文化人、労働者、農民（ただし農民弾圧については史料未入手）が一〇年以上の懲役か、無期懲役で獄に繋がれたとされる。[1] 弾圧の急先鋒を担ったのが、保安司令部、保密局、調査局などの特務機関で、それらは監視体制を強化し、台湾民衆の言論、思想の自由を圧殺した。

二・二八事件研究はすでに多く、犠牲者の名誉は回復され、少なくない書籍、論文、資料集、及び回顧録も出ており、研究の蓄積も少なくない。それに対して白色テロは、台湾ですら現在着手されたばかりでほとんど研究がなく、弾圧された人物、家族などの回憶録、聞き取りなどによる資料集作成の段階である。日本での研究は、管見の限り皆無と思われる。では、なぜ本研究は遅々として進まないのか。その理由は、弾圧された家族と共に、弾圧した本人は死去している者が多いとはいえ、その多くの家族、親族が生存しているからである。弾圧側の歴史的な罪は追究され、その実態を明らかにすべきではあるが、その家族は原則的に罪はない。このように、台湾人にとって極めて敏感な問題なのである。台湾で白色テロ被害者である家族は私に研究の必要性を力説した。「日本人歴史研究者ならば、相対的に冷静にこの問題を直視し、実態を解明できるのではないか。是非とも研究して欲しい」、と。したがって、どこまで解明できるかわからないが、このテーマに斬り込んでみることにした。

とはいえ、私はすでに台湾原住民に対する白色テロについては一定の知識がある。なぜなら、すでに台湾原住民に対する白色テロについて論文を書いている（著書『台湾北部タイヤル族から見た近現代史』集広舎、二〇一七年所収、第五章「一九五〇年代国民党政権下での台湾『白色テロ』と原住民」を参照されたい）。したがって、本論文では原住民

に関しては割愛したが、それを基盤、もしくは導き手として、外省人、本省人（「内省人」とも称すがこの違いに関して不明）に視野を広げる。まず白色テロの①背景を押さえながら、②本省人・外省人の台湾大学、台湾師範大学の学生と卒業生、③医者など医療関係者、④当時の状況を正確、かつ構造的、立体的に把握するため、白色テロの際、処刑認可をだしながらもやはりアメリカに逃亡し、蔣介石の国民党独裁政権を批判した元台湾省主席の呉国楨、及び李万居、さらに⑤当時、白色テロが日本華僑社会にどのような影響を及ぼしたのか否かも考察に加え、多角的視点からアプローチしたい。

なお、主要に使用する檔案は最近公開されたもので手続きの上、幸いにも審査を受け閲覧できた。ただし、速記によるペン手書き、毛筆書き、タイプ印刷など多種多様で、不鮮明なものも少なくない。内容的に重複したものもあり、わかるものは記述したが、どうしても判別不能な文字は□にした。また、国家人権博物館『医人治世――白色恐怖受難医師群像』（二〇一七年）は医師の写真、略歴、思想、遺書など人物像に迫れるもので、資料として使用した。その他、国家人権博物館・中央研究院台湾史研究所編『獄外之囚――白色恐怖受難者女性家族訪問紀録』上・中・下（二〇一四年）は三冊本の大部なもので、被害者家族への本格的な聞き取りで充実しているが、遺憾ながら本稿では原稿締切日の関係から使用するに至らなかった。

一　一九五〇年代台湾「白色テロ」の背景

一九五〇年三月一日蔣介石は復権し、台北に「国民政府」が正式に樹立された。最後の砦たる台湾を固守するため「反共抗ソ」政策を実施した。だが、国民党政権は二・二八事件により台湾民衆との間で緊迫した状況が続いていた。それを打開するため、国民党はまず「二・二八事件容疑者保釈委員会」を設立し、「懲役五年以下の者の保釈準備」を採択した。これに則り五〇年二月「二・二八事件の関係容疑者」七〇数人を保釈した。さらに四月五日、行政院は蔣の指示で「二・二八事件容疑者で未保釈者」の保釈を決定、五月二三日審議を終えた。だが、実際は国民党政権はむしろ次の弾圧策を着々と陰で準備していた。国民党は大陸戦場での惨敗と挫折により「共産党を恐れ、恨む」心情がとりわけ深く、かつ中共による台湾攻撃を憂い、白色テロの準備を開始していた。すなわち、四八年国民党政権はまず第一回国民代表大会で「動員戡乱時期臨時条款」を強行提出し、蔣介石独裁の基礎を確立した。そして、四九年五月一日台湾全島で戸口調査を実施し、二〇日には戒厳令を発布した。その他、関連法案として「国家総動員法」、「懲治叛乱条例」、「動員戡乱時期匪諜肅清条例」（「防共」のために、四九年七月から省級公務員に連座制を採用）、「非常時期人民団体法」、および「台湾地区戒厳時期出版物管制弁法」（省政府がマルクスの『資本論』などを「反動書籍」として査禁）等々、矢継ぎ早に出した。かくして、五〇年五月末までだけで秘密裏に検挙した「政治嫌疑犯」は「一〇〇〇人以上」に達したとされる。(2)

米ソ冷戦が形成されるに伴い、アメリカは台湾を太平洋の重要な戦略要地と見なし、国民党政権の台湾撤収期間、アメリカは国民党の敗残兵と難民の台湾への過度な流入を阻止しようとした。そして、韓国、日本、およびベトナム、フィリピン各政権と共に、「太平洋反共防衛線」

（「共産中国包囲網」）上の軍事基地化しようとした。したがって、アメリカは台湾の蔣介石政権を打倒し、新たに「自由主義的」な別政権（例えば、親米派の孫立文政権樹立を考えた。その際、蔣支持のファッショ的な軍統は除外）を樹立する暇もなかった。こうして、アメリカは台湾

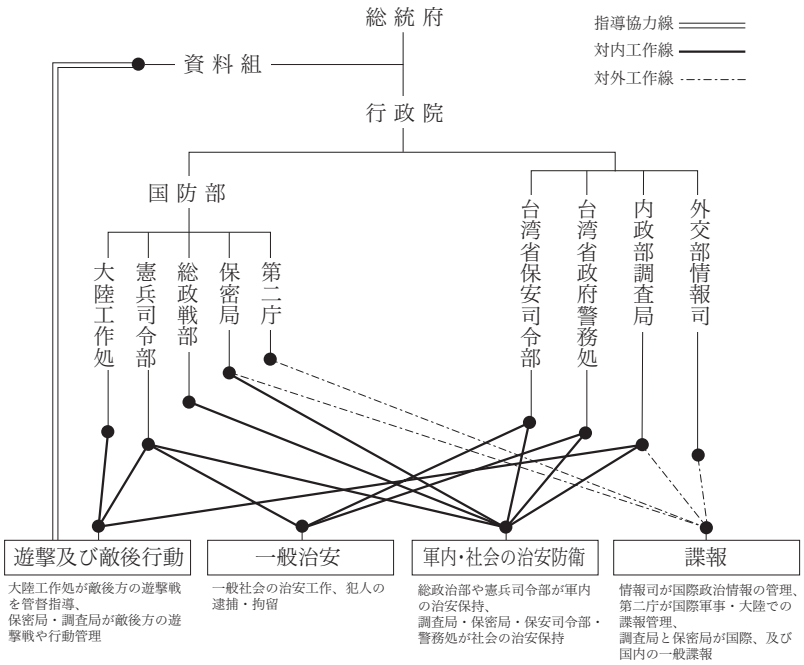

図１　台湾情報治安機関系統図（1953）

出典：国家人権博物館『医人治世――白色恐怖受難医師群像』2017年、15頁参照。

に敗退して来た蔣介石・国民党政権を支持せざるを得なくなり、その白色テロを黙認することになる。五〇年六月二五日朝鮮戦争が勃発し、アメリカ大統領トルーマンの指令を受けた第七艦隊が、中国共産党軍による台湾攻撃を阻止する目的で台湾海峡に投入された。このことが、不安定極まりなかった蔣介石・国民党政権が安定に向かう契機となった。七月三一日、連合国軍最高司令長官ダグラス・マッカーサーの一行が台湾を訪れた。その後、一グループのアメリカ軍事連絡員を総統府に入れ、無線通信器を設置した。蔣介石はアメリカの支援を熱望した。その結果、五一年から六五年までに四三億米ドルの軍事支援を獲得できた。五一年一〇月一〇日、国民党政権は台北で大規模な閲兵式を挙行した。五四年一二月二日には「中（中華民国・台湾）米共同防衛条約」を締結した。アメリカ軍の軍事顧問団はこの時点で「台湾共同防衛司令部」と変化した。同時にアメリカの黙認の下で国民党政権は秘密裏に「反攻大陸」を放棄したが、依然として「反攻大陸」を鼓吹し、長期にわたる強権的な独裁統治を確立したのである。[3]

国民党政権による五〇年代白色テロ（一九五〇～五四年）の特徴は以下の通り。

(1)多種の条例を運用し、民衆関連の政治、経済、社会はもちろん、文化と精神生活の内容まで全面的にコントロールしようとした。

(2)大陸時期における「軍統」（「藍衣社」）、「中統」（「C・C」系）など多系統の情報治安・特務機構を駆使し、相互に競争、監視させた（**図1**）。

(3)軍内の統制系統を重視し、陸・海・空三軍はそれぞれ独自なやり方で、常に「戦時軍律」を運用し、各軍内の不穏分子を処断した。軍

内の政治工作制度、特に「保防（保全・防衛）系統」がテロ政策を立案、実行した。

⑷多元的な情報治安・特務系統は最終的には「動員戡乱時期国家安全会議」に帰属するとするが、実はその最高指揮権は蔣介石個人が掌握していた。

社会基層を有効に統制するために、民政、警政両面の組織や規定はとりわけ多かった。警民協会、民衆服務站の設立、「匪諜自首弁法」、「五戸連保弁法」、「国民身分証制度」、および機関人事制度の「安全規定」などである。テロ政策の最初の一手はテロの危険性を過剰に鼓吹し、国民の恐怖と危機意識を煽ることである。「匪（共産党）と通じている者は死」（すべての映画館で放映前に銀幕にこの文字が映し出された）、「スパイはあなたの身辺にいる」、「スパイ検挙はすべての人々に責任がある」、「匪を知っていて通報しない（知匪不報）者は匪と同罪」などの宣伝スローガンが街中に溢れた。駅、市場などの公共の場所には常に赤文字の布告が張り出され、内容はその日、銃殺された「共産党スパイ」の姓名、年齢、本籍などが書かれていた。新聞、雑誌には反共作家の文章が掲載され、スパイの邪悪、醜悪な面貌が描かれた。それに対して「反共英雄」、特に「共産党員の検挙」の「愛国」的な記事が氾濫した。(4)

白色テロの下で逮捕から裁判までの状況は以下の通り。①逮捕機構は非常に多く、警察、憲兵、特務などが法的手続きを無視して逮捕する。例えば、必ずしも逮捕状を示さず、家族に通知するとは限らず、尋問には時間的制約はない。この結果、人が突然消えたように見える。多数の人々が各地の秘密監獄内で数ヵ月から数年にわたり痛めつけられる。②五〇年代初期には軍事法廷への移送後、起訴状はなく、弁護士はつかず、傍聴人もいず、上訴できない。中期にはやや改善され、弁護士をつけ、上訴権もあり、判決書もだすようになったが、白色テロの雰囲気の下、弁護士の多くは「反乱嫌疑者」案件を弁護しようとはしなかった。③幸いにも死刑の判決を免れた被告は執行機関に送られる。「反乱」案件の受刑者は国防部軍人監獄に入るが、形式の異なる分支機構があり、なかでも有名なのが集中営方式を採り、絶海の孤島である「緑島新生訓導処」である。④残酷なのは政策執行の必要からでた捏造案件、あるいは「予防」目的の脅迫性の案件である。軍内、教育界、公務界、文化界、および原住民、華僑などに一連の冤罪事件が発生した。(5)

では、ここで弾圧対象となっている中国共産党（以下、原則として中共と略称）との関連に論を進めたい。果たして中共は実際に台湾に流入していたのであろうか。流入していたならば、具体的にどのような形で流入していたのか。あるいは、中共と原住民とは関係があったのか。法務部調査局（中統、いわゆる「C・C」系）によれば、「中国共産党台湾省工作委員会」の正式成立は一九四六年五月で、中共華東局に従属していたとする。台湾籍の蔡孝乾が省工作委員兼書記で、広東籍の洪幼樵が省工作委員兼宣伝部長、台湾籍の張志忠が省工作委員兼武装部長であったとする。中共中央は「高山族と外省同胞の工作展開」を台湾省工作委員会の主要任務の一つに決めたが、主に日本植民地時代の旧台湾共産党員を吸収したに過ぎず、発展は緩慢で、原住民工作を実行する能力はなかった。四六年五月から四七年二・二八事件までの時期、省工作委員会は台北市工作委員会、台中県工作委員会、および台南、嘉義、高雄三市に支部を設けたが、全員で七〇人余に過ぎなかった。二・二八事件後、省工作委員会は政治に不満な青年学生を基礎に順調に発展し始め、

四八年春には党員は二八五人となった。ただし都市に限られ、原住民工作は依然として展開できないでいた。[6]

二　「台湾民主自治同盟」案件の「叛乱」嫌疑と裁判の実態

苛酷な状況下での供述であったことは疑いなく、先に「罪ありき」・「疑わしきは罰する」の姿勢をとる調査官も少なくなく、かつその共産主義理解を含む思想的な力量も問われ、すべて正確とは限らない。「台湾民主自治同盟」は、台湾大学の学生運動、及びその延長線上にあり、二・二八事変を経て蔣介石・国民党政権に不信感を持った学生、卒業生たちが同志を集め、マルクス理論、中共文件、及び大陸の情勢に関する読書会を開催し、勉強会を開いたというものである。

(1)呉哲雄供述：男、二四歳、台湾嘉義県出身、職業は嘉義自動車客運有限公司業務処主任、「匪」（中共系）台湾学生委員会参加の嫌疑。①一九四九年台湾大学法学院政治系二年を卒業。九月同学の張璧坤の紹介で共に「台湾民主自治同盟」に加入した。その時、参加した同学は張英傑、欧振隆、供金盛、鄭文峯、凃炳榔、蔡長洲らである。②張璧坤が会議を三、四回開催した。開催場所は台北円山河畔（草坪）と台南である。会議では、自己紹介後、唯物弁証法、唯物史観を討論し、各大学での活動状況を紹介した。③一九四〇年一〇月呉哲雄、張璧坤、張英傑ら計一〇人で獅頭山に行き、演芸会を開催後、張璧坤が徐州での中共の勝利情勢を講述した。④一切は張英傑が連絡をとることとし、呉哲雄、張璧坤は共産思想を研究し、民衆から同志を集めることとした。

(2)欧振隆供述：男、二四歳、台南県出身、台東鹿野郷農会主計員。呉哲雄と同じ嫌疑、①一九四八年台湾大学法学院商学系入学。同年、大学内の民謡話劇団に参加し、張璧坤と知り合う。そこで、蔡長洲の紹介で張璧坤の読書会に参加した。参加者は、蔡長洲、鄭文峯、呉哲雄、張英傑、洪金盛らが参加。②四九年九月張璧坤の誘いで「台湾民主自治同盟」に参加。同年一〇月末、円山河畔草坪で李傑と会い宣誓をし、「自伝」（経歴、思想など）を書き、かつ組織を発展させるように指示された。③私と洪金盛は一組で、張璧坤の指導を受けた。④一九五〇年初頭、張璧坤の指示で呉逸民を「台湾民主自治同盟」に参加させ「自叙伝」を書かせた。そして、それを張璧坤に渡し、張が呉と直接会うことになった。[7]

参加経緯は大体同じなので、以下のメンバーについては重複しているところを除き簡潔に記述すると以下の通り。

(3)呉逸民：男、二四歳、台南県出身、台湾大学法学院商学系四年在学中。「案件」呉哲雄と同じ嫌疑。「呉市長三連之子」（市長の三男という意味か）との書き込みあり。一九五〇年初頭、同学の欧振隆が政府（蔣介石政権）への不満を述べたが、私も同感であった。欧は「台湾民主自治同盟」への参加する意思があるか否かを問い、その後、張璧坤を紹介した。張璧坤によれば、「台湾民主自治同盟」が「台湾人民の自由を勝ち取る」ものだという。張璧坤、欧振隆、呉逸民三人一組で、欧が連絡係であった。

(4)呉崇慈：女、二二歳、江蘇省出身（外省人）、台湾大学法学院商学系三年在学中。「案件」は「匪嫌」（中共党員の嫌疑）。①一九四七年八月姉の呉崇欄と共に、（大陸から）台湾に来た。台湾の書店

員。四九年一二月台湾省教育庁から彰化中学書記に派遣された。②四八年張璧坤と会った時、彼は上海から台湾に戻った後、連絡するといった。そこで、住所を教えた。しばらくして張と周慎源が（彰化の）自宅を訪れた。四九年夏、彰化から台北に行き、台湾大学の入学試験を受けた。台湾大学合格後の四九年一〇月張璧坤と獅頭山旅行に行った。③台湾大学在学中、海天合唱団、台湾大学文芸社、雨音合唱団、音楽研究社などに参加した。④五〇年春、張璧坤は李潔を紹介した。李は私に共産党組織に参加するようにいった。その後、李と二、三回会い、学校（台湾大学）の状況を話した。⑤五一年冬期休暇に張英傑の指示で、(イ)国内外情勢に関する認識、(ロ)当面の情勢認識、(ハ)過去の（共産主義）工作が低迷原因、(ニ)大学後期の計画を書いて提出した。

(5)涂炳榔：男、二四歳、嘉義県出身、台北師範大学芸術系四年在学中、「匪嫌」。①張璧坤と同郷である。一九四九年夏期休暇に彼の家で酒を飲んだ。その他、呉哲雄、洪金盛、張英傑ら七、八人で（大陸での）国民政府軍の敗北、共産党勝利の状況を語り合った。また、彼の家で（毛沢東の）『新民主主義（論）』や（マルクスの）『資本論』などを読んだ。

(6)洪育樵：男、二四歳、南投県出身、台湾大学工学院電機系四年在学中、「匪嫌」。一九四九年一二月張英傑は『青年の修養』（劉少奇「論共産党員的修養」一九三七年七月は有名。その間違いの可能性もある）、『唯物論弁証法』（調査官がマルクス主義に精通していない可能性があり、『唯物論』、『唯物弁証法』と区分けしていない）、『いかに大衆を指導するか』、『鋼鉄はいかに鍛えられたか』（ソ連・ニコライ・オストロフスキーの自伝的小説）などの書籍を貸してくれた。

(7)陳潤澤：男、二四歳、雲林県出身、台湾大学農学院農業経済系四年在学中、「匪嫌」。一九四九年一〇月張璧坤と同学の関係で獅頭山旅行に参加。獅頭山で会議を開催した時、張璧坤は、大陸で共産党がすでに勝利を収めたとし、また「四・六学生運動」についても語った。獅頭山から台北に戻った後、「張璧坤は危険分子」（との告示？）を見た。同年冬期休暇に涂炳榔の台南県（嘉義県？）の家に行き、会議を開催し、東台湾区の学生との連繋問題を論じた。

(8)黄則林：男、二四歳、嘉義県出身、台湾大学農学院森林系四年在学中、「匪嫌」。張璧坤とは同郷、同学の関係から獅頭山旅行に参加した。張は『唯物論弁証法』一冊を読むように渡した。四九年五月同学黄嘉烈は私と石鴻隆と話し合い、現在の不満や大学生活改革について話し合った。私は大学では健康社に参加しただけである。

(9)張昭宗：男、二四歳、台南県出身、台湾大学工学院土木系四年在学中、「匪嫌」。大学入学後、張璧坤と同じ宿舎であった。獅頭山旅行に参加した。大学では友愛合唱団、楽群音楽社、民謡話劇団などに参加。呉崇慈が『鋼鉄はいかに鍛えられたか』の本をくれた。

(10)洪金盛：男、二四歳、台南県出身、無職、台湾学生委員会に参加後、自首。一九四九年台湾大学で民謡話劇団に参加。また、張璧坤の読書会に参加、計七人であった。四九年夏期休暇に台南の張の家に読書会の七人の外、涂炳榔も参加、会議を開いた。その後、台北に戻り、円山河畔で会議を開き、「台湾民主自治同盟」に六人が参加、三組（二人ずつ）として欧振隆が連絡係となった。四九年一一

月張璧坤が宿舎に来て私に学生工作委員会への参加と「自伝」を書き、かつ李潔に会い、宣誓した。私は台湾民主自治同盟が「匪」（中共）の外郭組織と知り、私は欧振隆の巻き添えになることを恐れ自首した時、その実態を正直に話さなかった。[8]

その上、中共党員と見なされたキーマンである張璧坤は逃亡して捕縛を逃れた。つまり主要人物を除いての尋問であり、裁判であった。そこで、当局が眼をつけたのが張璧坤の手足として動いていた欧振隆である。

台湾保安司令部での欧振隆に対する尋問である「偵訊筆録（記録）」（年月日不詳）を見ると、主に呉逸民が「匪党」に参加前後の経過、状況に対する質問などであった。

呉逸民は同学で同じクラスであった。私（欧）が「匪党」に参加した以後、張璧坤は絶えず私に「匪党」に（仲間を）吸収するように要求したが、私にはその術がなかった。そこで、呉逸民とは仲が良かったので、彼を参加させることにした。一九五〇年九月初頭のことであろうか、大学の余暇の時間に「台湾民主自治同盟」への参加を誘った。彼は拒絶しなかった。そこで張璧坤と面会させた。張璧坤は我々に理論研究を要求した。張璧坤に渡された『唯物論』、『弁証法』などの本を私と呉逸民、洪金盛三人で読んだ。

次いで台東県警察局刑警隊の欧振隆に対する尋問（尋問日一九五二年二月一八日）は、上記の内容をさらに詳細に記述しているので重要な問答を選抜し、要約すると、

【問】話劇団は学校当局が組織したのか。

【答】学校当局が組織したのではなく、組織後、学校に登録した。読書会で使用した本は香港印刷の『新中国』、『唯物史観』、『光明報』、劉少奇の『青年修養』などの書籍である。張璧坤が共産党員とは知らなかったが、宣誓の時、彼が共産党員と初めて知った。その他、張璧坤が与えてくれたのは『新民主主義論』及び毛沢東の言論など共産理論の書籍である（その他、『中国之抗戦』、『光栄帰於民主』など「反動書籍」閲読）。また、張璧坤は以下のように求めた。休暇で里帰りする時、当地の「流氓」（無頼）や地元勢力の豪士などを勧誘して小組を組織し、共産党が台湾侵攻時に内応せよ、と。

【問】準備工作をしたのか。

【答】（そんなことは）していない。

【問】宣誓した時、共産党の何らかの組織に参加することになることは知っていたのか。

【答】私が知っていたのはただ読書会に参加した約一年後、張璧坤の通知により円山河畔で読書会全体が「台湾民主自治同盟」に参加することであり、私が小組の責任者になったことである。個別宣誓時に共産党に参加したことになるとは全く知らなかった。

【問】小組は武器をもっていたのか。

【答】武器などない。ただし当地の獅子舞隊、国術館、及び無頼組織には武器があり、これらの武器を利用して警察局や小部分の軍隊を占領し、そこで武器を奪い、（中共に）内応することはできる。

【問】張璧坤の資金源はどこか。

【答】張璧坤は民謡話劇団所属の時、資金は百貨店の経理兼董事である黄東林が支援していた。その後のことは知らない。むしろ我々が党費として五元を徴収されていた。

【問】政府が自首を呼びかけた時、なぜ自首しなかったのか。

【答】政府の自首の方法を公表したことを知っていた。ただ新聞掲載の自首名簿に知人が掲載されていないことを懐疑していた。他方でもし自首したり、機密を漏洩すれば、張壁坤は我々とその家族を殺害するといっており、私は自首できなかった。(9)

以上のように、マルクス理論と中共指導者の書籍は読んではいたが、当初、中共組織に加入したとは考えなかった。中共の台湾進攻への準備はしておらず、武器などないと返答しているにもかかわらず、誘導尋問をおこない、欧振隆から「ただし当地の獅子舞隊、国術館、及び無頼組織には武器があり、これらの武器を利用して警察局や小部分の軍隊を占領し、そこで武器を奪い、（中共に）内応することはできる」との発言を引き出した。資金源もほとんどなく、中共からの支援も考えられるが、脆弱であったのではないか。自首に関しては、新聞掲載の自首名簿への不信感、及び張壁坤による「脅し」からできなかったとする。

では、欧振隆はいかなる家庭環境で育ったのだろうか。彼の「自伝」によれば、家は台南県にあった。兄弟姉妹七人。（日本統治時代）父は澱粉工場を経営しており、裕福であったが、詐欺にあい倒産後、料理店経営に転じ、その後、順調になった。兄弟は中等学校に進学。大戦により料理店は統制を受け売却。父と兄は南洋に行き、澱粉工場技師として働き、次兄は日本の□事工場に就職した。光復（日本敗戦）後、父は田畑を売却し、鉄鋼場を建てたが、景気が悪く、その上、二・二八事件で操業停止となり倒産した。こうして、父は失敗して貧乏になったが、教育熱心で私を家名振興のため大学に進学させてくれた。最後に「今日、新たな人間となることができ、真の中華民国国民、光明の道を歩むことは非常に幸福で嬉しいことである。今、従来の一切の罪悪を洗い流し、国家のため、民族のため服務し、反抗大陸・中華民族の復興をする」(10)、と述べている。欧振隆は洗いざらいさらけ出しているように見え、処刑になるとは考えなかった模様である。

だが、台湾省保安司令部軍法処第二科「起訴書」（一九五二年五月二七日）の内容は厳しいものだった。

①呉哲雄らは「匪徒」張壁坤の紹介で「匪民主自治同盟」に参加、張の指導で連続五回の開会し、『唯物弁証法』、『鋼鉄はいかに鍛えられたか』、大陸学生の活動情勢、大衆哲学、農村問題、アメリカ政党、『青年修養』、『ソ連党史』などを検討し、かつ「匪軍」（中共軍）の勝利を宣伝した。②洪金盛は張壁坤の指導で「自述」を書き、李潔監督の下、「秘密を保持し、永遠に匪党に服務する」と宣誓した。③五〇年春、被告（欧振隆）は呉逸民を「匪党」に参加させ、「武装工作小組」の組織化を企図した。以上の事実から呉哲雄、欧振隆、洪金盛らは保安司令部軍法処、同保安処警察局の供述により「叛乱組織」と集会に参加、人員を吸収し、拡大したことが判明する。『懲治叛乱条例』各条に違反、また洪育樵の「明知匪諜而不告」は『戡乱時期検粛匪諜条例』に違反しており、起訴するものである。(11)、と。

だが、「中共軍の勝利」は事実であり、また、尋問で例えば、前述したとおり簡単な武器は入手できるといったことが、「『武装工作小組』の組織化を企図」とまで悪意をもって拡大解釈されてしまったことは致命的であった。

一九五二年七月二二日軍事法廷で台湾省保安司令部の判決の「主文」によると、

・欧振隆は非法な方法で政府を転覆しようと意図して実行に着手。死刑。公民権の終身剥奪。全ての財産はその家族が必要な生活費を除いた外、没収。

・呉哲雄、洪金盛は非法な方法で政府を転覆しようと意図して実行に着手。それぞれ懲役刑一五年。公民権剥奪一〇年。全ての財産はその家族が必要な生活費を除いた外、没収。

・呉崇慈、呉逸民は叛乱組織に参加。それぞれ懲役刑一〇年。公民権剥奪一〇年。

・涂炳榔は連続して叛乱集会に参加。懲役刑一〇年。公民権剥奪一〇年。

・洪育樵は明らかに「匪諜」と知りながら検挙のための密告をしなかった。懲役刑五年。[12]

かくして、一九五二年一二月一〇日台湾省保安司令部から台湾憲兵隊に「叛乱犯欧振隆」処刑の命が出た。

①国防部の批准を受けて執行、②一二月一一日午前五時三〇分死刑執行を宣告。……本市川端橋南端刑場で銃殺決行。③本件はすでに副抄本を本部に送付。軍事検察官金士祥。

司令兼任：呉国楨　副司令中将：彭孟緝。

同日、台湾省保安司令部軍法処から欧振隆の家族に書簡が送付された。叛乱犯欧振隆一名は（民国）四一年一二月一一日死刑を執行。遺体は台北市極楽殯儀館に送り納棺する。もし対面したければ期限内に、この通知をもって同殯儀館を訪れること。[13] 台湾省大学学生委員会責任者の李潔、台湾大学支部書記の張璧坤というトップクラス二人を取り逃がした結果、地位の低い小組長欧振隆を見せしめとして処刑した可能性を否めない（**図2**）。

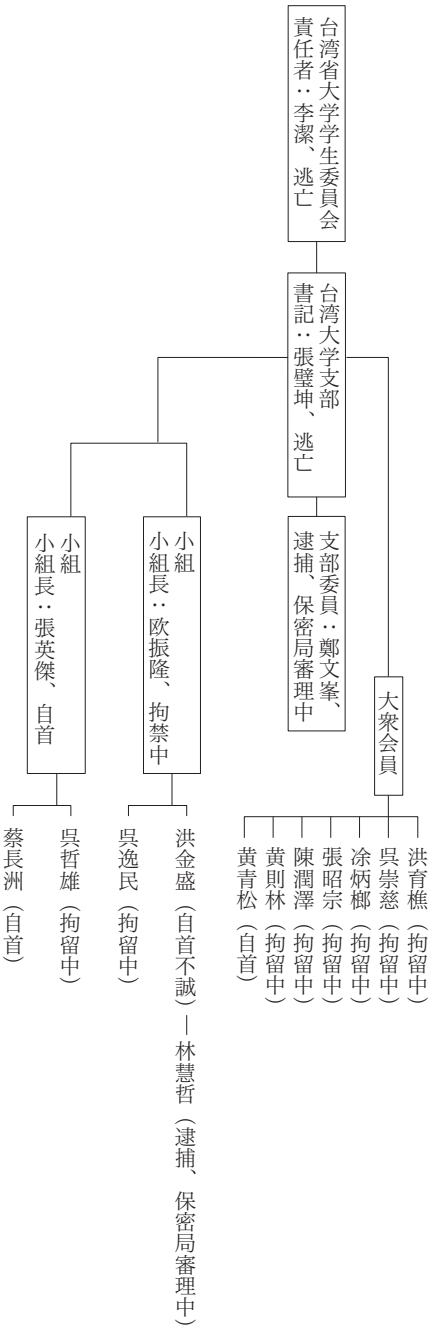

図２　台湾省大学学生委員会系統図

出典：国家発展委員会檔案管理局所蔵0043/276.11/7「呉哲雄等叛乱案」所収、台湾省保安司令部「匪張璧坤□□□織概況図解」警備総司令部軍法処作成図など参照。

ところで有期懲役刑の場合はどうなるのか。洪金盛を例に見ておきたい。

洪金盛は懲役一五年であったが、その期間が満期釈放となった時、保証人は「保証書」を国防部泰源感化訓練監獄に提出する。

「保証書」（一九六六年一二月一日）の内容は以下の通り。釈放後、再び「匪のための工作はせず、あるいは非合法団体で政府に反抗せず、並びに政府の法令に遵守し、指定された仕事と教育官管を受ける。もし管理教育に違反し、隠れて逃亡したり、その他の不法な状況があった場合、保証人は自ら責任を負い、管理教育員が当地の治安機関に交付した報告を受け、処理する必要がある。

それに同意した保証人は洪鴻哲（台南県・台湾洋釘股份（株式）有限公司会計）、張栄金（台南県・台湾省鉄道管理局貨物運搬服務所事務員）である。そして、保証人に対して、台南県警察局派出所警官の蔡□□が担当する。ただし保証人は誰でもなれるものではない。「具保須知」（保証人心得）によれば、以下の条件を具備していなければならない。①現在、特任（一等級）を含み、それ以上の公務員、②現在、「少校」（日本の少佐相当）を含みそれ以上の「官員」（政府軍人）、③保釈人の直系尊属（正業を有している者）、及び「管隣里長（町村・地区長）、④国内での営業許可を有し、資本金五〇〇〇元以上の商店、工場経営者等々である。[14] 換言すれば、家族、親戚、知人に安定した地位、職業を持っている者がいなかった場合、もしくは家族、親戚、知人がいてもこうした事件の巻き添えになることを恐れ、積極的に保証人になることを忌避した場合は、釈放が困難になったことは推測に難くない。

洪金盛（三九歳）が泰源感化訓練監獄看守所から軍法処に提出した書類では、一九六七年三月九日刑期満期で思想は「改正」、言行「良好」学習成績「七四・五」で、「審査意見」は「刑期満期で保証人を立てて釈放可」とある。なお、特技は会計、統計、電気工学である。より具体的にわかる「審査表」の「教誨教育経過」によれば、刑確定後、一九五二年一二月二〇日国防部台湾軍人監獄に移送し、教誨教育を受けたが成績は良くなかった。一九六〇年四月一〇日軍人監獄から本所に移り、研究組に編入、教誨教育試験を毎月一回受けたが、成績は乙などであった。また洗濯、土木作業にも参加させた。学習態度は真面目になった。一九六五年七月再び軍人監獄に移送、同年九月本所へ再移送。毎月の教誨教育試験は乙のままであるが、土木作業への参加は良好である。[15]

「教化心得」三民主義が「富強康楽」の新中国を建設するための唯一の主義であることを深く信じるようになった。「教誨を受けた感想」では、（中共の）「専制必敗、暴政必亡」で必ず大陸を光復できると信じる。「自らの行動保証」では分を守り、良い国民となる。

「今後の進路」仕事に就く。他方で、もし機会があれば中途であった学業を全うしたい。

家族構成は父（自由業）、母（家庭主婦）、長男は洪金盛、次男は洪鴻哲（台湾洋釘公司の工場職員）、三男。[16]

洪金盛の「誓書」（一九六七年三月九日）。これはタイプ印刷されており、既成のものと見なせ、出所する時、皆、これを読ませ、署名、拇印するものと考えられる。内容を見ると、ここに誠意をもって宣誓する。「永久に匪幇から離脱し、永久に匪幇に参加せず」、いかなる「反動活動」（ここでの「反動」とは蔣介石・国民党政権への反対運動などを指す）もせず、今後は三民主義を信奉し忠誠を誓い、政府の指導を受け、

表１　呉崇慈関連の台湾大学学生

姓名	性別	年齢	本籍	台湾大学所属	現住所	備考
宋斌拴	男	23	福建省莆田	法学院経済系４学年	台湾大学男子学生第４宿舎	1951年度の雨音歌咏団総幹事禁止歌集出版、「匪」のために活動
万啓光	男	25	雲南省石屏	法学院経済系４学年	同第４宿舎	大量の「台湾特務人員に告げる書」を送付
蘇炳炎	男	23	福建省恵安	法学院法律系４学年	同第４宿舎	台湾大学の雨音歌咏団総幹事、禁止歌集出版、読書
陳迪	男	22	浙江省慈谿	電機系４学年	同第５宿舎	
林豊郷	女	22	福建省南安	農学院園芸系３学年	女子学生第３宿舎	呉崇慈と親友。呉によれば「正義感が強い忠実な分子」
蔡損恵	女	？	不明	外文系１学年	同第３宿舎	
陳肇嫄	女	？	北平	農業化学系１学年	同第３宿舎	
林信子	女	？	台湾省高雄	法律系１学年	同第１宿舎	
陳月紅	女	22	浙江省永□	歴史系１学年	同第３宿舎	

出典：国家発展委員会檔案管理局所蔵0043/276.11/7「呉哲雄等叛乱案」所収、台湾保安司令部→黄潮□議長、1952年3月10日。

法令を遵守し、並びに指定された仕事、及び一切の監督を受け入れ、「反共復国」のために努力する。もし宣誓に違反した場合、最も厳しい制裁を受けることを願う」[17]、と。

なお、呉崇慈には他の系列があるという。**表１**によれば、これはすべて台湾大学学生であり、宋斌拴（男）二三歳、福建省、万啓光（男）雲南省を始め、台湾省高雄出身の林信子を除けば各省に出身者である。いわば外省人の学生団体であったことがわかる。男子学生四人、女子学生五人であり、いわば学生寮を中心に活動していた。ただし活動内容は禁止歌集出版や「台湾特務人員に告げる書」の送付など、一般的な学生運動の範疇に包括されるもので突出する活動をしていたわけでない。ただし呉崇慈との関係で「台湾民主自治同盟」の外郭団体として危険視した可能性がある。入手檔案からは、呉崇慈を除く彼らの刑罰は不明である。

ところで、「新民主主義青年同盟」は警察関係者が捕縛されたものとして看過できない。台湾省保安司令部（一九五〇年五月一七日）によれば、被告鄭臣厳、王隆煜、林範、龍道典、龍亜電、方飛、呉作枢、陳華、李維特らは、前後して「新民主主義青年同盟」に参加し、軍事・政治の秘密偵察に従事したことはすでに供述から立証された。最初の判決では法に則り「共同で非法な方法で国憲を変更し、政府を顛覆する意図で着手、実行した」ことにより有罪と見なす。それぞれ情状の軽重に鑑み、鄭臣厳、王隆煜、林範、龍道典、龍亜電、方飛六名は各処で処刑とし、それぞれ公民権を終身剥奪する。呉作枢、陳華、李維特三名は懲役一二年とし、公民権一〇年剥奪とする。嫌疑犯の方雪漁、呂松濤、頼傑

表２　「新民主主義青年同盟」関連の主要人物

被告	性別	年齢	出身地	現住所	職業など
鄭臣巌	男	30	広東省饒平県	台湾省警察学校宿舎	台湾省警察学校訓導員
王隆煜	男	28	広東省澄海県	台北市警民協会宿舎	台北市警察局第一科科員
林範	男	33	広東省□陽県	台北市警察処宿舎	台湾省警務処第四科科員
龍道典	男	26	湖南省城歩県	高雄市警察派出所宿舎	高雄市派出所警員
龍亜電	男	24	湖南省会同県	高雄市（以下、未公表）	高雄市港務警察所警員
方飛	男	21	湖南省零陵県	高雄市警察局派出所	高雄市警察局第六分局警員
呉作枢	男	29	福建省雲霽県	彰化市中山国民学校宿舎	国民学校教員
陳華	男	29	浙江省平陽県	台中市（以下、未公表）	台中烟葉試験所所員

出典：国家発展委員会檔案管理局所蔵、国防部軍法局0039/3132050/50「鄭臣巌等叛乱案」所収、台湾省保安司令部判決（1950年５月17日）などから作成。なお、原文の湖南省「陵零」県と記載されているが零陵県の誤りと思われる。

三、陳可立、劉寄塵、甘可鵬、蕭明柱、羅漢祥七名は罪状の立証が不十分であるが、ただ思想は不純であり、各処で感化訓練一年六ヵ月を課す。その他、蕭明華ら五名も犯罪立証が不十分であり、監察を続ける。[18]

表２によれば、「新民主主義青年同盟」の構成員は、すべて広東省や湖南省出身の外省人であり、蔣介石・国民党の大陸からの逃亡と共に台湾に来た者たちにみえる。その特異さは彼らの職業がほとんどが警察関係ということであり、かつ警察の宿舎で活動をおこなっていたことになる。そして、毛沢東の「新民主主義」論をベースにグループ名を付していることである。これは自らそう称したのか、かれらを捕縛した特務機関が付したのか定かでない。ただし、特務機関としては大陸からの中共勢力の流入と捉え、かつ銃を保有しており、危険性があると見なして厳罰を下したものと考えられる。だが、六人もの処刑はやはり異常である。

三　医者に対する「白色テロ」

白色テロを特色づけるものとして、医者を対象としたことがあげられる。

学生委員会は（台湾省工作委員会所属の？）台北市工作委員会下に一九四七年に成立した。主に台湾大学、省立台湾師範学院（現在の国立台湾師範大学）の学生を吸収することが目指された。その後、学生が帰郷した際、オルグ活動をおこない、学生委員会の活動範囲は基隆や台湾中南部にも拡大した。学生委員会は成立当初、廖瑞発が指導し、その後、指導者は詹世平、徐懋徳（仮名は「李傑」。以下、李傑）が続いた。委員には陳水木、楊廷椅らがいた。そして、台湾大学本部支部（丁某）、台湾大学法学院支部（陳炳基）、台湾大医学院支部（劉沼光）、省立師範学院支部（陳水木）が次々と設立された。四九年に四六事件（実態不詳）が発生し、台湾大学と省立師範学院の数多くの学生が逮捕された。八月には台湾大学法学院卒業の王明徳が逮捕されるという「光明報事件」が起こった。そこで、共産党員は相継いで身を隠した。五〇年五月李水井、楊廷椅、陳水木が次々と逮捕され、学生委員会は瓦解した。この流れの中で逮捕された医師が後述する葉盛吉、顔世鴻、旗山病院の林恩凱ら三人である。[19]

では、処刑された各医者の人物像と死刑理由に迫りたい。

第一に、郭琇琮は一九一八年台北市士林生まれ。日本植民地時代に差別を体験し、反日思想を抱いた。四一年台北帝国大学医学部に入学後、北京語を学び、上海、廈門、広州を旅行し、祖国中国に憧れた。士林協志会に参加。四四年四月、日本憲兵隊に検挙される。

日本敗戦後、台湾学生連盟の組織化に参画し、三民主義と中華民国国歌を教えた。九月台北帝国大学医学部を卒業、前後して同大学付属病院第一外科、衛生局防疫課に勤務。この時期、マラリアとコレラが大流行し、高級中学学生を連れて台湾中南部で防止活動に従事した。だが、郭は国民党政権の腐敗政治に反発を強めた。四七年三月二・二八事件を契機に学生隊を組織して武装蜂起するが失敗。五月林雪嬌と結婚。六月中共入党、積極的に社会運動、文化教育工作に参加した。だが、国民党当局の「中共地下組織」弾圧に遭い、逃亡したが、五〇年五月に嘉義で夫婦で逮捕された。九月末、郭は「不法な方法で政府転覆を企て実行した罪」で処刑。一一月妻は「懲役一〇年」の判決を受けた。[20]

第二に、許強は一九一三年台南の農家出身。台湾総督府の台北高等学校時代から「封建・植民地主義・改良主義反対」を主張していた。三六年に台北帝大医学部に進学、最初の学生となった。三九年医師の劉順娣と結婚。四五年九月九州帝大で医学博士を取得。日本敗戦後の一一月台湾大学付属医院第三内科主任に昇格。四八年一、二月頃、郭琇琮の紹介で中国共産党台湾省工作委員会に加入。六、七月頃、台湾大学付属医院支部が成立し、書記に就任。医学部の杜聡明、李鎮源らと台湾大学医院接収小組を結成し、台北帝大医学部の資産継承に協力した。その時、接収過程、及び上海視察で政治制度の多くの不正を知り、体制改革の決心をした。五〇年郭琇琮らが次々と逮捕され、五月一三日には、台湾大学医院院長室から許強も胡鑫麟、胡宝珍、蘇友鵬と共に連行された。許強の拘留時期、妻子や友人に判決を少しでも軽減するために「悔悟書」を書くことを勧められたが拒絶。九月「非合法に政府転覆を企図して実行に着手」との罪名で死刑判決を受け、一一月二八日許強は郭琇琮ら一三人と共に処刑された。

許強の「自白書」（五〇年五月一七日）によれば、妻と五人の子供がいる。共産党入党の動機は以下の通り。①日本統治時代に祖国（中国）を想い、医学を研究することで貢献したいと願っていた。台湾が光復（日本植民地から解放）した時、感激して落涙した。だが、光復後、政府官僚による台湾人への圧迫、汚職無能の官僚の作風には限りなく失望した。国父（孫文）の三民主義は非常によい主義である。だが、国民政府の施政は三民主義とあまりに乖離している。果たして政府は三民主義を実行する能力はあるのか。三民主義を実行する気はあるのか。こうした懐疑の念が頭をもたげた。②政府は研究者に対して全く無関心で、それを支援する気がないことに失望した。私は、偶然にもソ連の革命的な小冊子を読んだ。レーニンは革命成功後、生理学者の「巴甫洛夫」（パブロフ？）の研究室を訪ね、「国家、人民のために研究を続けるように」と励ました。私はこの一節に深く感動した。③大学は国家の最高学府であり、最高研究機関である。教授は研究能力に富む優秀な人材でなければならない。教授任命が極めていい加減である。大学は教授が中心となって教え、学問を修める。各学院は自治を有する。これが民主制度下の最低原則である。

今後の希望は、「医学を以て人民、人類に貢献したい」と述べた。[21] 許

強の夢は権力によって断たれた。

第三に、葉盛吉は一九二三年台北生まれ。四一年台北帝大予科不合格。そこで、日本留学を考え、試験準備をした。四三年旧制二高（後の東北大学教養部）合格。日本滞在の五年間、彼は「皇国青年」から次第に脱却し、台湾との同一性に目覚め、かつ祖国中国に憧憬を持つに至った。四五年三月旧制二高を卒業し、東京帝大医学部に進学。日本敗戦後の四六年九月台湾大学医学院に転学。二・二八事件後、台湾大学自治会理事兼宣伝刊行物の編集担当。大学の友人と上海、南京などを旅行し、中国大陸で貧窮問題と階級問題が深刻なことを知った。四八年九月共産党加入。四九年七月台湾大学医学院卒業、第一内科で実習。五〇年一月鳳山兵営で軍医、三月台湾省マラリア研究所潮州分所に異動し、研究に従事した。五月二九日潮州で逮捕され、一一月二九日銃殺。遺書には「私は終始決して政府を転覆する意図はなかった」と書かれていた。[22]

また、銃殺前の一一月一二日には生まれたばかりの息子葉光毅に向けて遺書を書き残している。「パパは、あなたが努力して医学（の道）に進むことを願っている。……それは、あなたに喜びを与えるのみならず、希望をすべての人類に与えることができるからだ。パパは毎日、ママとあなたが平穏に過ごせることを上帝（一般的な神も意味するが、近現代ではキリスト教の神で創造主を意味することが少くない）に祈っている[23]」。「上帝」と書いているので、獄中、もしくは銃殺前にキリスト教に改宗した可能性もある。

このように、彼らは医者という職業に誇りを持ち、人々を救える仕事と確信していた。それ故、信念と鋭敏な感覚を同時に持ち、蔣介石・国民党政権に真っ向から立ち向かったといえよう。

では、処刑を免れ、緑島の「新生訓導処」送りとなった多くの政治犯を見ておきたい。

第一に、顔世鴻は一九二七年高雄生まれ。三〇年父母と共に中国大陸に渡り、福建省に転居。そこで父母も親族も抗日運動に参加、特に父は台湾抗日同盟軍に参加したため、二度も日本の特高警察に捕まり、拷問を受けた。こうした子供時代の経験から顔世鴻は日本に怒りを持っていた。三七年日中戦争が勃発したため、八月台湾に戻る。三九年台南第二中学に入学。四五年台北帝大予科に合格、日本敗戦後、台湾大学医学院に進学、五〇年一月葉盛吉の紹介で共産党入党。六月一日に医学院宿舎で逮捕され、「懲役一二年」の判決を受けた。

顔世鴻は尋問で「私は衛生を研究しており、好ましい衛生環境を創るため、社会主義国家で理想的な公共衛生環境を創出し、死亡率を減少させることを望んでいる。……私は理想主義者であり、革命家ではない」、と。結局、五一年五月緑島「新生訓導処」送りとなり、彼がここに監禁された最初の政治犯である。六二年に一二年間の刑期満了となった。だが、分隊長に賄賂を渡すという悪慣習を拒絶したため、「訓戒延長一年六ヵ月」となり、今度は小琉球という小島に送られた。六四年に解放され、台湾大学医学院に戻り、六七年卒業。医師国家試験にも合格し、台南救済院成功医療所に勤務し、七〇歳でそこを退職した。[24]「国家転覆」を考える革命家ではなく、「理想主義者」と強調し、それが認められたことで、処刑を免れたのだろうか。

第二に、胡鑫麟は一九一九年台南生まれ。四二年台北帝大医学部卒業、同大学付属病院の眼科医。四四年李碧珠と結婚。二・二八事件後、国民党政権の無能さを見て中共の宣伝する革命路線を支持する気持ちと

なった。四九年七月蔡孝乾の紹介で共産党に加入。その時、蔡は「参加者はすべて台湾人である。台湾人の問題は台湾人自ら解決する。再び外省人に欺かれてはならない。台湾（人）は武力も経済力も政治力もなく、皆政府に対して不満を持っている。共産党組織は民衆の要求を解決できる」、といった。胡鑫麟はこの言葉に心を動かされた。五〇年許強らと共に逮捕された。六〇年の刑期満了で出獄。だが、その後も当局の監視や嫌がらせがあったようで、七六年に台湾を脱出。日本など海外で暮らし、医者の仕事に戻ることはなかったようだ。その代わりに海外在住期間に台湾語が次第に忘れられていく状況を憂い、辞典作成に尽力、九四年に『実用台（湾）語小辞典』を出版した。九八年死去。[25]

第三に、蘇友鵬は一九二六年台南生まれ。四三年台北帝大予科（理科・医類）に合格。士林協志会に参加、郭琇琮らと出会う。日本による中国侵略戦争の進展に伴い、台湾総督府は同化政策を加速させ、「姓氏改名」を推し進めた。蘇はそれに反発し、最後まで改名しなかった。とはいえ、戦争動員時期で学徒兵として徴集され、淡水などで防御陣地構築などの作業に当たった。

日本敗戦後の四七年三月郭琇琮指導の台湾学生連盟に加入。当時、「国語」（北京語）をしっかり学び、流暢に話したいと思っていた。だが、国民党政権の失政、及び台湾民衆を罵る腐敗官吏に対して失望。二・二八事件の時、前述の如く郭琇琮らは武装反抗を試み、南飛行場の倉庫攻撃をするが、失敗（未遂？）。四九年台湾大学医学院を卒業。五〇年五月許強らと共に逮捕された。九月二一日「叛乱組織」に加入したとして「懲役一〇年」の判決であった。その時の唯一の物証は魯迅の『狂人日記』を持っていたことであった。かくして、緑島の「新生訓導処」に送られたが、そこで胡鑫麟らと共に医療隊を結成。並びに政治犯で構成する楽団に参加、中秋節にはバヨリンを奏でた。こうして、音楽により苦難の日々の中で自らを鼓舞した。六〇年五月一三日刑期満了で出獄。六一年李鎮源ら三人の医者が保証人になってくれ、台北鉄道医院耳鼻咽喉科に就職。八六年には台湾鉄道局から表彰される。八七年「第一回中華民国十大傑出医師」の金龍賞を受賞。二〇一〇年「五〇年代白色恐怖案件平反（名誉回復）促進会」に就任し、[26]白色テロの真相解明と犠牲者の「名誉回復」に着手した。

なお、白色テロで被害を受けた医者、医療関係者は台湾全土に分布している。台湾は小さく（九州とほぼ同じ面積）、逃亡する場所が限られていた点、また、医者という職業上、隠れることすらしなかった者もいる。懲役刑なども含めた計一〇四人（内、外省人三六人）中、死刑は一九人（内、女は医者と看護婦の二人）である。日本留学経験者は五人で京都大学、千葉医科大学、東京慈恵医科大学、日本歯科専門学校、及び「留日医学博士」（大学名不明）である。[27]

四　「白色テロ」批判――呉国楨と李万居

ここでは、当時、白色テロを批判した人物として呉国楨と李万居をとりあげなくてはならない。他に李宗仁の動向にも着目しているが、今回は原稿締め切り期限と紙幅の関係から割愛する。

まず、台湾省主席呉国楨は保安司令を兼任しており、処刑判決に応じてそれを認める公印を押す立場にあった。その任に耐えきれなくなり、アメリカに逃亡したといえよう。

呉国楨の特別寄稿「あばかれた国府の実態」（『台湾民報』一九五四年一〇月一日）は、中共を非難しながらも蔣介石の台湾統治を批判し、アメリカ人の蔣支持に警鐘を鳴らした。

「アメリカ人は台湾が民主的に運営されているとしらされている」。だが、その実態は「台湾は警察国家として歪められ、中共とは全くちがいはない。蔣介石大元帥はなほこの島の最高権力者であり、彼は息子蔣経国を後継者に立て、権力の代弁者にしている」。「国民党及ひ軍隊にたいする彼（蔣経国）の統率力は大変なものであり、秘密警察の長として彼は共産党政府の方式に従つてやつている。彼は青年隊を組織したが、これ等は共産党青年団やヒットラーユーゲントの二番せんじだ」（なお、旧仮名使用はそのまま残した、句読点の一部は筆者が読みやすさを考慮して付している。以下同じ）。前述したように蔣経国が事実上の秘密警察の長で、これは総統府内に本部を持ち、防衛司令官の彭猛輯を通して実施された。

「私の（省長としての）仕事は容易ではなかつた。中共の台湾攻撃の危機はひしひしとせまつていたし台湾人の国府（国民政府の略称）に対する不満は非常なものだつた。……貨幣価値は七ヵ月の中に十四分の一に下落し、インフレーションはおさへやうのない状態にありながら、六十万もの国府軍が逃げて来て八百万台湾人の上にあぐらをかく仕（始）末である」。

「私は台湾の民心が中共にむくのを防ぐために、台湾省の省委員に二十三人の台湾人を起用した。私は法治と民主的な政府をつくることを提案したが、秘密警察は私のやることをかたつぱしからこわしていつた。彼等は省の財政庁へやつて来て、何等の証據なしに役人を逮捕したりした」。蔣介石に対して「民間人を逮捕する場合には、省や市の警察に委ねるべき」と抗議したが、改善されなかった。逮捕者は軍法会議に回される。だが、ここでは公平な審議員もなく、弁明も許されない。私は、「共産党関係以外のケースは裁判所にうつすやうに蔣介石に提案した」が、拒否された。私は再度辞任を願い出て、台湾民主化への努力をうち切った。[28] 呉国楨は政権運営のひどさ、そして、恣意的な逮捕、裁判の劣悪さを鋭く告発しているのである。

では、呉国楨とは何者か。その略歴を見ておきたい。呉国楨（1903–1984）は、湖北省建始出身。一九二一年北京清華学校を卒業後、アメリカ留学。アイオワ州のグリネル大学経済学部を卒業、二四年プリンストン大学修士、二六年同大学で政治哲学博士を取得。帰国し、政治大学教授。三一年湖北省財政庁庁長、三二年漢口市長を務めたが、三八年一〇月日本の侵略により漢口陥落。三九年重慶市長兼重慶市防空副司令。四三年中英互換条約批准の全権代表。四五年八月国民党中央宣伝部長。四六年上海特別市長、四九年一二月台湾省政府主席兼保安司令。五〇年三月台湾省反共保民動員委員会主任委員を兼任。五二年国民党中央常務委員、台湾物資委員会委員。[29]

この経歴からもわかるように、呉はどちらかといえば、学者肌の文民派で、財政・経済から地方行政、中央行政をてがけ、立場上、軍や治安、及び中央宣伝部の要職も務めたとはいえ、それは自らの意志ではなかった。蔣介石が強権政治を強めていくにしたがい、反発を強める必然性があったといえよう。そして、五二年四月省主席を辞任して訪米し、自らの身の危険も感じてか亡命する形でアメリカに留まり、台湾には戻らなかった。その結果、五四年国民党籍を剥奪された。

第二に、李万居による「一四ヶ条事件」である。一九五四年九月台湾省参議会の開会時、「非台湾人的台湾人」と称される李万居が突然立ち上がり、①（台湾）「島内に現在ある秘密警察と軍の特務機関の数、人員、主管者名を公開せよ」。②「現に監禁してゐる及び既に処刑した政治犯の名簿、その逮捕、判決に至る経過を公示せよ」など、公然と一四ヶ条を叫んだ。

「一九四七年の二・二八革命以来、未だ曾つてなかつたことであり、居合せた省参議員、一般聴衆は固唾を呑んで聞き入」った。「幾年来、人々が心の奥底に抑へつけてきた声なのだ。よくぞ云つてくれた」と叫びたいが、「次の瞬間起るべき怖ろしい光景を、台湾人は永い恐怖政治下にあつて直感」し、沈黙した。だが、何も起こらなかった。国民政府委員たちは「答弁する必要なし。政府（に対する）誹謗だ。即刻逮捕せよ」と主張した。その時、事件を巡って国民党内では、「銃殺すべし」、「冷却期をおくべし」とか激しい議論が巻き起こり、まとまらなかった。そこで、蔣介石に裁決を仰ぐということになった。

李万居は蔣介石と直接会うことになった。蔣介石は、もし呉国楨と関係があるなら「即刻銃殺だ」といった。李万居は呉とは無関係で、蔣介石総統を尊敬していると述べ、ただ政府のやり方はよくなく、是正を求めただけだ、と述べた。蔣介石は、外国人記者がいる場所でああしたことをいうのはよくない。アメリカからの支援が必要で（台湾を安定させねばならず）、それは台湾人にとってもよいことだ、と述べた。後に知人に対して李万居は当時のことを回想して、国際情勢が微妙に動くようになってから国府の弾圧は一層厳しくなり、それに比例して民衆の憎悪の念も募った。自分はこれ以上台湾人に憎まれるのが怖ろしくなった、と答えた。そして、外国人記者もいる公開の場所でいえば、なにもできないだろう、と考えた[30]、と。

李万居の主張は極めて正当であり、「処刑した政治犯の名簿、その逮捕、判決に至る経過」はやっと現在開放され始めたばかりであり、「秘密警察と軍の特務機関の数」などは今もって不明点が多い。なお、李万居の狙い通り公開の場で外国人記者がいたことが幸いしたといえよう。アメリカの支援を切望する蔣介石は李万居に厳罰を下せなくなった。とはいえ、李万居にとって蔣介石と直接面会できたことは驚きであり、その後、李は蔣介石批判をしなくなったようである。

五　日本華僑に対する「白色テロ」の影響

では、白色テロは日本華僑にどのような影響を及ぼしたのか否か。当時、日本華僑はどのような動態を示していたのか。檔案史料が入手できた横浜、大阪、長崎を中心に論じていきたい（神戸も採りあげる予定であったが、遺憾ながら関係檔案は未入手）。

一九五四年一〇月二三日台湾省保安司令部から外交部に対して次のような通達が出された。①日本華僑はジュネーブ会議閉幕以降、中共活動工作員の宣伝を受け、指導が麻痺した者が日に日に増大している。②日本政府の曖昧な態度と関係があり、政府、及び外交当局は注意すべし[31]、と。

周知の如くジュネーブ会議とは一九五四年開催の朝鮮、インドシナ両問題等を巡る会議で、英・米・仏・ソの外、インド、中国など一八ヵ国が参加、中華民国ではなく、中華人民共和国として初めて参加した国際

会議である。インドシナ停戦協定が締結されるなど一時的に東西冷戦の緊張緩和をもたらした。国民党の中国大陸での敗退と人民共和国成立後、次第に隠然たる力量を有してきたことに警戒感をもっていることがわかる。そして、日本政府の施策を「曖昧な態度」として不満を持ち、それが華僑に影響しているというのである。

第一に、横浜

一九五四年八月横浜総領事館は京浜地区の（蔣介石・国民党政権に）忠実な華僑各団体を動かし、「中華民国留日華僑各団体反対李逆徳全来日大同盟」を組織させ、積極的に宣伝工作を実施した。横浜、横須賀などで李徳全が来日した時飛行場で「李徳全来日反対」の旗を掲げ、ビラを撒いた。この時、参加学生の一人が殴られ、入院した。各華僑団体は献金し、慰問した。また、同盟は東京の新橋駅前で演説大会を開催した。一一月一一日華僑、華僑学生二〇〇人が李徳全の滞在先に行き、その活動を糾弾した。[32] また、昨年、李徳全が訪日した時、華僑と（中国人）海員が反対運動に参加している。[33]

日本公安庁の華僑主管責任者によれば、李徳全の訪日後、左派華僑はすでに（中共を）信用しており、ますます積極的に団結している。その影響の及ぶところ右派華僑は次第に動揺している。李徳全、廖承志は再三にわたって左派華僑に大陸貿易を開放した時は絶対に華僑を優先的に参加させることを保証するといっている。したがって、一般華僑に台日貿易機会への参加を開放し、政府の保護下で事業を発展させる。[34] 貿易、商売の関係から「左派華僑」は団結を強化し、「右派華僑」は動揺している。したがって、台湾も一般華僑に政府保護下で台日貿易機会を与え、対抗すべきといっているのである。ここで、注意すべきは二点であり、一点目は日本公安庁が情報を流していることであり、二点目は白色テロ下の台湾が日本華僑を含む世界華僑に貿易をどこまで開放できるかという点であろう。

ともあれ李徳全[35]の訪日、さらに知日派で日本人脈を有す廖承志[36]が活発に動いていた。この情勢に総領事館は敏感となっており、総領事館が中心となって国民党支持の華僑を煽動し、李徳全、廖承志反対運動を展開した。

東京華僑総会に登録している華僑で大陸訪問を計画している華僑は約一〇〇〇人おり、中共の厳格な審査を受け、僅か二六〇人余が乗船して行くことが許可された。青年学生、技術人員が主であり、その内、横浜からは二三人であった。日本政府が一人日本円六〇〇〇～七〇〇〇円を補助し、中共も募金で各帰国華僑を支援した。ただこの補助費は決まった額ではない。[37] 中国は青年学生、及び思想が原則的に入らない技術人員に期待をかけていることが理解できよう。

横浜市教育委員会は一月三〇日横浜のアメリカ軍体育館で新春慶祝大会を開催した。市長平沼亮三に招待で孫総領事と華僑学校学生が参加した。その時、ソ連、中共、北朝鮮各代表も参加していることを発見した。そこで、総領事はそのことをアメリカ軍に知らせ、彼らを退出させ、その後、各国領事も退席した。結局、アメリカ軍により慶祝大会そのものが中途で解散させられてしまった。[38] このように、中・台双方の代表者、華僑、学生が顔を合わす場はあったが、アメリカ軍の規制により結局は軋轢から大会全体が流れてしまった。

一九五五年二月華僑羅文軾は横浜総領事館の孫領事らに招聘され、

「亜洲同済会」付設の華僑服務処籌備会に参加した。その際、山下町の中華百貨公司三階にある華僑朱相印が設けた一貫道の仏堂に集まった。参会したのは、韓雲階、羅文軾、沈雁、朱相印、韓国人の朴京植、及び広東会館館長の龐柱琛ら二〇人余である。韓雲階は、「匪共（中共）は日本で華僑を騙す陰謀を展開している。我らは宗教精神で華僑に奉仕することで大衆を獲得する一助とすべきである。我らの工作は秘密裏に政府の国策に呼応し、次第に反共の効果を収める」と指摘した。韓雲階は前後して日本、明治、早稲田、慶応、中央五大学でそれぞれ留学部設置を計画し、「亜洲学会」を充実させるため、三笠宮、于斌を正副総裁に、胡適、林語堂を顧問に招聘し、各大学学長、法務・外務両省の人員を理事にするなど大きな計画を立てた。その手始めに日本、明治両大学に留学生部を設置する予定であった。[39] 押さえておくべきことは、宗教的秘密結社の一貫道が反共の立場から参画していることが理解できよう。また、韓雲階は日本大学などの留学生部を梃子に著名な三笠宮、于斌を正副総裁に、胡適、林語堂を顧問に招聘し、「亜洲学会」創設を構想したが、全体として計画倒れに終わってしまったようである。

ここで、横浜総領事館管轄下の静岡華僑総会（熱海が所在地）を見ておきたい。

静岡華僑総会会長周銀昌の求めに応じて、横浜総領事館は人員を派遣し、周銀昌や理事の陳文卿らと話し合った。その際、周銀昌によれば、東京華僑総会から合作の申し出があったが、拒絶したという。だが、東京華僑総会から『東京華僑会報』、『大地報』、『華僑天地』、『人民中国』など、毎期「宣伝品」を送付してきているとする。調べてみると、東京華僑総会副会長の徐志軒、古炳麟、理事の伍美月、及び候補理事周欽塗らは皆、左派分子のようである。伍美月は五四年秋、大陸側の「留日華僑協商会議」に参加した。周欽塗は華僑代表として一度（中国）大陸に行っている。「留日華僑協商会議」、「留日東京同学会」なども「匪幇（中共）集団」である。したがって、当面、忠実分子の団結を強化して対抗すべきである。もし警戒を強化し、積極的に有効な措置をとらなければ、日本僑務の前途は楽観できない。当日、周銀昌会長らは政府の反共国策を擁護する決心を述べ、本年内に団を組織し、台湾観光を口実に（蔣介石）総統に表敬訪問する計画である。その際、二つの見解を述べるという。①誤った途（中共支持）に入った華僑に接近、彼らを味方にする。さらに寛大な政策によって政府支持へ次第に変えさせる。専ら打撃を加えるのはよくなく、反抗を招くだけである。②願わくば政府は貧苦で頼る術がなく台湾に戻る華僑に対して無料で国営の汽船に乗船させ救済し、政府の配慮を示して、それを宣伝する。[40] 以上のように、静岡華僑総会の反共姿勢は明白であり、東京華僑総会などに対抗して団結を強化すべしとする。また、蔣介石にも面会に行くといい、華僑に打撃を加えず寛大な政策をとること、貧窮華僑などへの便宜を図ることを求めるという。こうした言動を見る限り、静岡華僑総会の周銀昌らは台湾の白色テロについて、うすうす気づきながらも、正確な実態までは、知らなかったのではないか。

第二に、大阪

大阪「付匪華僑」は一九五四年一一月日本における「付匪華僑」に対する廖承志の指示は匪の国際新聞社を利用し、大阪華僑銀行を通して関西地区の華僑に働きかけ、いわゆる「大阪華商会議所」（総商会の性質

を有す）を組織する。廖承志は一九五四年一一月日本に至ったとき、「付匪華僑」に指示を出し、「統一的な事業団体」を組織し、華僑経済事業の発展と華僑の各種問題（失業問題を包括）解決の機構とする。並びに各匪幹部に機に乗じて方策を設けて推進し、華僑の団結などを促進することを促す。呉百福らは五四年一二月準備工作を促進した。呉百福らが印刷発行した「設立趣旨書」によれば、「日本の経済界が空前の不景気に直面している状況下で日本華僑が経済、社会各方面で依然として法を守り奮闘しているのは敬服している」。「華僑工商業は日本経済の中で占める位置は大きくはないとはいえ、無視できない影響力を有す構成者が個人企業を強化し、華僑経済を発展させると同時に、日本経済界に対して貢献するために華僑は民間と相互にかつ常に密接に接触し、徹底的に了解を求める」[41]とある。大阪でも廖承志が指導力を発揮していることが分かる。日本の不況の中でも「大阪華商会議所」を軸に華僑経済の発展と華僑の失業問題解決の機構とし、日本経済界にも貢献するとする。

では、「大阪華商会議所」の組織経過をもう少し見ておきたい。①大阪華僑銀行理事長の呉百福は一部の左派分子を策動し、「大阪華商会議所」を組織したが、人数に限りあるため、一般華僑の参加を誘導することを企図した。②同会議所成立前、呉百福は創立の趣旨として、工商業発展への協力、関係経済資料の調査収集などをあげた。そして、黄領事を招いて一九五四年一二月一四日に成立大会を開催することにした。だが、黄領事は組織動機が中共との貿易を画策しているとして出席を拒んだ[42]。「大阪華商会議所」は中共よりの左派組織として黄領事は成立大会出席を拒んだとする。このように大阪総領事館と大阪華僑銀行、「大阪華商会議所」は明白な対立構図にあった。

大阪華僑商会議所はすでに会員六〇余名で、成立時には大阪のみならず、神戸、京都を包括して華僑二〇〇名、他に日本人二〇〇名の加入を予定している。政府側の華僑にも呼びかけており、「その陰謀、殊に注意すべし」とした[43]。

第三に、長崎

本館は管轄区の各僑と連携し、「各華僑のために服務を拡大する」ことを重点工作としてきた。華僑の各種困難の解決を助け、その生活を安定させる。そして、心から愛国心を持って、我政府（国民党政権）への信頼を促進し、それによって「反共の意志を堅固なものとする」[44]。とりわけ南九州、琉球一帯の老華僑は多年にわたり我政府の官員に会っていないが、心から忠実に政府を擁護している。

長崎領事館は華僑団体、華僑学校、党部が共催で各種の慶祝や記念行事を開催し、当地の日本人の政治要人、外国人名士も招聘して講演し、祖国の進歩した状況、及び「匪共の陰謀」、「反共抗ソ」の努力目標を簡潔に講演し、並びに華僑に対して団結を強固にし、当地の人々と良好な関係をつくり、生活の安定を図り、かつ政府・国家に忠を尽くすように鼓舞している。なお、台湾で製作した映画を何度も上映しているが、一九五四年夏、長崎で上映した際は、華僑三〇〇〇人余も見に来た。

福岡、長崎各地の華僑団体は招聘、訪日した「反共義士」を熱烈に歓迎し、並びに講演座談会を開催、日本の新聞社やラジオ放送局人員を招き、広く宣伝し、日本人の自覚を高め、華僑の反共決心を強化した。

ただし、九州華僑の歴史は長いと雖も、知識水準は低く、経済状況も京浜・神阪各地の華僑に比してはるかに及ばない。

注意すべきことは、青年華僑が東京、京都などに進学した時、「匪共」に惑わされ、帰郷後、隠れて「匪共」のために動き、かつ日本の左派分子と交流することである。本領事館は日本の関係機関と共に随時注意を払っている。(45)

おわりに

以上のことから以下のようにいえよう。

第一に、蔣介石・国民党政府は日中戦争に勝利し、台湾を光復（奪還）した。台湾民衆は素直に日本植民地からの解放を喜んだ。だが、激戦を経て台湾に到着、行進している国民政府軍の兵隊は服装も貧弱であり、頼りなかった。これが強敵の日本軍の侵略をうち破り、勝利を収めた軍隊とはとても思えなかった。その上、国民党の軍・官僚の質は悪く、台湾の政治・財政などを独占した外、極度のインフレ、汚職、略奪も絶えず、それに反発し、激怒した台湾民衆は台湾各地で反国民党の暴動を起こした。国民政府は、それを徹底的に弾圧した。二・二八事件である。その後、国共内戦で中共に大敗北を喫し、大陸を失い、台湾に逃げ込んできた。ここに中国大陸奪還を掲げた中華民国政府（蔣介石・国民党政権）が成立した。「日本植民地統治」の残滓ともいうべき「日本語世界」、台湾人の外省人への反発、二・二八事件により疑心暗鬼となった蔣介石・国民党政権は軍と警察の特務機構などを通じて暗黒の独裁政治を敢行した。いわゆる「一九五〇年代白色テロ」である。冷戦激化に伴い、アメリカはそれを座視し、自由を失い独裁統治の台湾を「自由世界防衛」のために利用した。このことが白色テロを国際的に抑止できなかった大きな理由である。

第二に、どのような人々が弾圧対象となったのか。まず台湾大学を中心とする、いわばエリート学生である。彼らは中国事情、マルクスやソ連の書籍、毛沢東や劉少奇の論文などの読書会を開いている。そして、仲間として友人に声をかけて集め、かける本人もさほど深く考えず、友人もさほど警戒心をもたず読書会に参加している。もちろん大陸事情には関心を有していた。その指導者である李潔、張璧坤二人が中共組織に属し、その組織拡大を図ったことになっているが逃亡しており、詳細は不明である。本当に正式な中共党員だったのか。ともあれ欧振隆がすべての責任をとらされ、見せしめ的に処刑された。また同組織に参加したとされる女子学生呉崇慈である。この別組織とされるのが学生寮中心に動いた男女学生であり、ほとんどが外省人である（一人だけ本省人）。この活動も禁止歌集出版など、たわいもないものであった。学生の場合、本省人、外省人それぞれがグループを創る傾向があるとはいえ、合流してもさほど違和感を持っていないように見える。

第三に、医者であるが、狙い打ちされた。やはり台湾大学出身者が多い。彼らはいわば医者という職業に誇りを持ち、「医学救国」という信念を有しており、多くが理想主義者であった。その結果、孫文・三民主義を掲げながら、実際は独裁統治をおこなう蔣介石に深い憤りを有していた。二・二八事件は政権反発を決定的なものにした。それ故、中共に接近することで台湾の改革を目指した。それは貧窮問題と階級問題を解決する道だと考えたからである。武装反抗を試みることもあったが、実施的意味での医療現場改革を社会改革の重要な一環と考えていたであろう。彼らは学生よりも信念を持っており、拷問、弾圧にも屈しなかった

ようだ。そして、自らの理想継承者として子供に託した。ここで、興味深いのは政治犯として緑島に送られた医者たちであろう。彼らは自らが政治犯であるが、同じ政治犯の治療をおこない、さらには地域住民の治療もしていたという。おそらく看守などの治療もおこなっていただろう。拷問、弾圧で有名な緑島（私も一度中央研究院近代史研究所の所員たちと共に参観に訪れたことがある）であるが、この事実をどのように考え、分析を加えるべきか。

第四に、白色テロ時期に自らもその執行する側の省主席を経験した呉国楨がアメリカに亡命し、蔣介石政権の暗黒部分を告発した。当然のことながら蔣介石を支持するアメリカの政府や民衆に対して真実を伝えようとしたものである。だが、アメリカ政府は冷戦期に台湾支援を止めることはなかった。換言すれば、前述した如くアメリカ政府は結果的に台湾白色テロに目をつぶり、その継続を許したことになる。

第五に、白色テロの日本華僑に対する影響である。遺憾ながら入手できた檔案史料は一九五四、五五年のもので、最も弾圧が厳しかった五〇年代前期のものではなかった。したがって白色テロそのものに言及したものは入手できなかった。大使館、総領事館、領事館の中で左派的人物を特定し、外交部などに報告している。また、李徳全の訪日、廖承志の活動を阻止しようと総領事館などが華僑に呼びかけ、反対運動を繰り広げようとする策動もあった。さらに資本主義台湾か社会主義中国かという選択で、当初は資本主義を選ぶ華僑も少なくなかった。だが、国民党の大陸での敗北という事実、経済・貿易を梃子に中国の影響力が次第に強まり、華僑も左派的傾向を強め、中国支持へと大きく傾斜していくことになる。ここで台湾の白色テロについて見ると、大使館、総領事館、領事館、さらに日本華僑も使用した檔案史料からその言動を見つけることができなかった。知っていたと考えられるが、公文書の中であえて言及は避けていた可能性もある。間接的であるが、静岡華僑総会会長周銀昌は台湾訪問華僑に対して「寛大な政策」を蔣介石に求めるというのは白色テロを意識してのことかもしれない。

註

（1）瓦歴斯・尤幹（呉俊傑）『Losin. Wadan（楽信・瓦旦）――殖民、族人与個人』一九九三年（？）、二八～二九頁。

（2）藍博洲主編（台湾民衆史工作室）『五〇年代白色恐怖――台北地区案件調査与研究』台湾市政府委託、台湾史文献会執行、一九九八年四月、一二～一三頁。

（3）藍博洲主編、同前、一三～一四頁。

（4）藍博洲主編、同前、一六～一七頁。

（5）藍博洲主編、同前、一六～一七頁。

（6）呉叡人「『台湾高砂族殺人事件』――高一生、湯守仁、林瑞昌事件的初歩政治史重建」、台湾市文化局・中央研究院台湾史研究所共催「紀念二・二八事件六〇周年学術研討会」（二〇〇七年二月二六日）での報告書、五頁。

（7）国家発展委員会檔案管理局0043/276.11/7「呉哲雄等叛乱案」所収、「呉哲雄等匪□案偵訊報告表」一九五二年三月一〇日。

（8）「呉哲雄等叛乱案」同前所収、「呉哲雄等匪□案偵訊報告表」一九五二年三月一〇日。

（9）「呉哲雄等叛乱案」所収、「筆録」（欧振隆に対する尋問）一九五二年二月一八日。台東県警察局刑警隊の欧振隆に対する尋問（尋問日一九五二年二月一八日）

（10）「呉哲雄等叛乱案」所収、欧振隆「自述」。

（11）「呉哲雄等叛乱案」所収、台湾省保安司令部軍法処第二科「起訴書」一九五二年五月二七日。

(12) 「呉哲雄等叛乱案」所収、「台湾省保安司令部判決」一九五二年七月二二日、軍事法廷（審判官・甘励行）。
(13) 「呉哲雄等叛乱案」所収、台湾省保安司令部「事由　希派員率兵執行叛乱犯欧振隆等一名死刑並具報由」一九五二年一二月一〇日→台湾憲兵隊など。
(14) 「呉哲雄等叛乱案」所収、「保結書」一九六六年一二月一日、「具保須知」など。
(15)(16) 「呉哲雄等叛乱案」所収、軍法処一九六六年一二月二七日、国防部泰源感訓監獄一九六七年一月一二日、「考核表」など。
(17) 「呉哲雄等叛乱案」所収、洪金盛「誓書」一九六七年三月九日。
(18) 国家発展委員会檔案管理局所蔵、国防部軍法局0039/3132050/50「鄭臣厳等叛乱罪」、参謀総長周至柔一九五〇年六月八日→総統蔣介石。
(19) 国家人権博物館『医人治世――白色恐怖受難医師群像』二〇一七年、四三頁。
(20) 『医人治世――白色恐怖受難医師群像』二〇～二一頁。
(21) 『医人治世――白色恐怖受難医師群像』二四～二五、二八～二九頁。
(22) 『医人治世――白色恐怖受難医師群像』四四～四五頁。
(23) 『医人治世――白色恐怖受難医師群像』四九頁。
(24) 『医人治世――白色恐怖受難医師群像』五四～五五頁。
(25) 『医人治世――白色恐怖受難医師群像』三二～三三頁。
(26) 『医人治世――白色恐怖受難医師群像』三六～三七頁など。
(27) 『医人治世――白色恐怖受難医師群像』一二五～一二六頁など。
(28) 呉国楨「あばかれた国府の実態――前台湾省長呉国楨特別寄稿」『台湾民報』（日本語版）第一七号、一九五四年一〇月一日。本新聞のモットーは「台人治台」（台湾人が台湾を治める）で、台湾民主独立党の新聞である。同党（主席は廖文毅）は一九五五年一月二三日神戸で秘密会議を開催し、十数人が集まった。宣伝スローガンは①台湾人が台湾を治める。②台湾には共産党は不要。③台湾の信託統治は不要。④現政権は台湾を離れ、台湾を台湾人に戻すべきなどである。

なお、呉国楨は一九四九年一二月二一日大陸での国民政府が崩壊に瀕した時で、蔣介石は私に月に「八百四十万ドル」の軍隊に対する支出を命じた、と述べている。

(29) 「呉国楨」『民国人物大辞典』河北人民出版社、一九九一年、三六二頁参照。
(30) 「一四ヶ条事件の顛末」『台湾民報』（日本語版）第一八号、一九五四年一一月一日。
(31) 国家発展委員会檔案管理局所蔵0043/61/9外交部所収、「日本僑務」台湾保安司令部→外交部、一九五四年一〇月二三日。
(32) 「日本僑務」同前所収（以下、同じ）、横浜総領事館「（民国）四十三年九月份工作報告」など。
(33) 「日本僑務」横浜総領事館→外交部、一九五五年三月四日。
(34) 「日本僑務」横浜総領事館→僑務委員会、一九五五年一月六日。
(35) 李徳全（1896–1972）は直隷省通州出身。キリスト教徒で女性政治家・活動家。馮玉祥の妻。協和女子大学学生会長、一九二一年卒業後、北京YMCA学生部幹事。二四年馮玉祥と結婚。二六年馮玉祥が下野し、張家口に住み、また共にソ連に行く。三〇年馮玉祥が中原大戦で敗北、下野後、共に泰山に蟄居。三三年五月馮玉祥の民衆抗日同盟軍組織化に伴いチャハル省に転居。三六年馮玉祥が国民政府軍事委員会副委員長に就任、李徳全は南京で婦女運動、抗日救亡運動に尽力。三八年夏、鄧穎超、宋美齢、蔡暢らと廬山開催の婦女領袖談話会に出席し、婦女慰労総会、中国戦時児童保育会（副理事長）を設立。同年重慶に移動、中ソ文化協会婦女委員会常務理事。抗戦勝利後の四五年一〇月中国児童福利事業協進会を設立、かつ婦女の政治参加を促進。四六年八月馮玉祥に随行、アメリカで国際婦女会議参加。四八年帰途の際、船舶火災で馮玉祥死去。四九年中華全国婦女連合会副主席、中国人民政治協商会議代表、五〇年中国紅十字会（赤十字）総会会長、一〇月保衛世界和平反対米国侵略委員会委員。五一年第一回世界和平理事会理事。五四年一〇月、五七年一二月中国紅十字会代表団団長として訪日。また、五五、五六年パキスタン、イタリアなどを歴訪。五四年から三期全人代代表。五八年、中共入党。五九年第三回全国政治協商会議委員。その後も赤十字中国代表、中国婦人会各代表としてモスクワ、デンマーク、キューバなどを歴訪。六五年第四回全国政治協会議副主席兼秘書長（家近亮子「李徳全」『近代中国人名辞典』霞山会、一九九五年、三

九一～三九二頁。「李徳全」『民国人物大辞典』河北人民出版社、一九九一年、三一五頁など参照）。

(36) 廖承志（1907–1983）は原籍が広東省恵陽で東京生まれの華僑。廖承志は日本華僑、日中関係・貿易を考察する上で看過できない重要人物である。父は廖仲愷、母は何香凝で父母と孫文、宋慶齢の影響を受けた。二七年早稲田大学第一高等学院に入学したが、中共指導下の社会団体に参加したため、日本の警察に逮捕され、二八年「学費未納」を理由に退学させられ、中国に強制送還。二八年上海で中共に入党、一一月党からドイツに派遣され、ドイツ国際海員労働組合で働く。三二年帰国、中華全国総工会宣伝部長、全国海員総工会中共党団書記。三三年国民党により逮捕、母の援助により釈放。三四年中共の川陝革命根拠地で張国燾の政策を批判したため一〇月逮捕され、三六年一一月周恩来の援助で釈放。延安では、党報委員会秘書。日中戦争が勃発すると、周恩来の指示で香港に行き、八路軍辦事処を設置、かつ華僑の抗日支援活動を組織化。四一年一二月日本軍による香港占領の際、民主人士や文化人の香港脱出を支援。四二年五月中共南方委員会で工作中に広東省北部で国民党により逮捕、四年間入獄。四六年延安で中央宣伝部副部長、新華通信社社長。四九年一〇月中華人民共和国が成立すると、中共中央統一戦線部副部長、対外連絡部副部長、全国青年連合会主席、国務院華僑事務委員会主任などを歴任。五五年バンドン会議に参加、中国外交の第一線で活躍。五二年日中民間交流が始まると、日中民間貿易協定の締結に寄与。五四年一〇月戦後初の訪日団である中国赤十字代表団副団長。六二年「日中総合貿易に関する覚書」（ＬＴ貿易）に署名、六三年中国友好協会会長（唐亮「廖承志」『近代中国人名辞典』霞山会、一九九五年、四五九～四六一頁参照）。

(37) 「日本僑務」横浜総領事館→僑務委員会、一九五四年一二月三〇日。

(38) 「日本僑務」横浜総領事館→外交部一（民国）四四年一月份工作報告」一九五五年三月四日。

(39) 「日本僑務」横浜総領事館→外交部、一九五五年三月一八日。

(40) 「日本僑務」横浜総領事館→外交部、一九五五年三月四日。

(41) 「日本僑務」内政部調査局編『匪大阪華商会議所籌設経過調査専報』一九五五年一月一五日。

(42) 「日本僑務」大阪総領事館→僑務委員会、一九五五年二月八日。

(43) 「日本僑務」僑務委員会→外交部一九五五年二月八日。二月二日にも僑務委員会は外交部に対して「査去年十一月廖匪承志抵日策動旅日華僑付匪分子組織所謂『大阪華商会議所』並拉攏正義華僑領為発起人及理事運用統戦策略以欺誘僑胞至堪注意」とある。

(44)(45) 「日本僑務」長崎領事館『（民国）四十三年度僑団僑胞輔工作検討報告」一九五五年三月一四日。